

複合助詞「として」の分類について

— 本動詞としての意味合いの度合いを中心に —

裊 銀 貞*

ejbael11@pufs.ac.kr

Contents

1. 先行研究の検討及び問題の提起
2. 資格・立場・部類・名目を表す「として」句
3. まとめと今後の課題

Abstract

本稿では、複合助詞「として」を考察対象とし、本動詞「～とする」の意味合いをどのくらい持っているのかを中心に、その類型を下位分類した。従来、複合助詞「として」と、本動詞の「～とする」の連用形である「として」は区別されるものであるという認識が強かったが、実際、この両方の「として」は、用法及び解釈の側面からみて区別が曖昧な場合も多い。

そこで本稿では、複合助詞「として」であっても、本動詞に近い場合とそうでない場合があり、類型別に分けられることを考察した。考察の結果をまとめると、複合助詞「として」には、本動詞としての属性を強く持っているタイプからそうでないタイプまで大きく三つのタイプとして下位分類できた。

さらに、複合助詞「として」に、本動詞の意味合いを強める要素には次のようなものが考えられるということを提示した。

< 「として」句の本動詞としての意味合いを強める要素 >

- ① 見なし、仮定などの意味合いを表す出来事であるほど、本動詞の意味合いに近づく。
- ② 共起する動詞の違いによって、本動詞としての意味合いに変化が生じる。
- ③ 「～として～を+V」の語順に比べ、「～を～として+V」の語順をとるほど、本動詞としての意味合いに近づく。
- ④ 「～として」と「V」の間に他の要素が介在している場合、本動詞としての意味合いが強くなる。

Key Words : 複合助詞、本動詞、仮定、共起動詞類、語順、要素の介在可能性

* 부산외국어대학교 일본어대학 전임강사.

1. 先行研究の検討及び問題の提起

本稿では、以下に示すような「AをBとしてV」文における複合助詞「として」に注目し、その類型を「本動詞としての意味合いの度合い」によって下位分類し、このような下位分類をできるようにする要因には何があるのかを考察する。

- (1) 子供部屋を三日間だけ、お客さん用の部屋として利用する。
- (2) 彼女を嫁として田中家に迎え入れた。
- (3) 彼を新入社員として採用した。

従来、「として」の用法には「として」がひとまとまりを成し、資格、立場・部類・名目などを表すという「複合助詞」としての用法と、「～とする」の連用形の形であり、「本動詞」としての意味合いを表す用法の二つがある。

例えば、下記例文(4)と(5)に用いられる「として」は「と」に本動詞「する」の連用形「して」が結合された形であり、例文(6)と(7)に用いられる「として」は、ヲ格名詞の資格の意味を表すひとまとまりの複合助詞「として」である。

- (4) 一週間たってもお返事がない場合はご辞退なされたものとして扱います。(グ)
- (5) 多額の不正融資が行われた証拠があるにもかかわらず、事実無根として片付けられた。(グ)
- (6) 神戸市地域福祉課は「地下水源を探していたので、予想もしないうけもの。せっかく福祉施設の造成地に出たのだから、(地下水源を)浴場として利用するだけでなく…。(塚本[1991])
- (7) 上記のことを留意点として挙げる。

以下、1.1と1.2では、「として」のそれぞれの用法の先行研究を簡単にまとめておくことにする。

1.1 「と+本動詞<する>」の連用形「として」

まず、「と+本動詞<する>」の連用形である「として」の用法を見ると、グループ・ジャマシイ(1998)で次のように説明されている。

「かりに…と考える」という意味で、現実がどうであるかということは別として、とりあえず仮定・想像の上でのことがらとして条件を設定する用法。「～を～のように見なす/考える/決める」という意味を表す。人の行動や方法を手本にしたり、行動を習慣として決めたり、ものごとを異なるものに見立てたりするといった様々な意味を表す。

(8) 私は恩師の生き方を手本としている。

(9) 祖父は散歩を日課としている。

(10) 裁判長は過失は被告側にあるとし、被害者に賠償金を払うよう命じた。

グループ・ジャマシイ(1998), p.341

つまり、「と+する」の連用形「して」の意味を持つ「として」は、仮定、想像の上での条件を表すという特徴を持つことがわかる。

一方、上記例文(6)と(7)のように、「として」が一つのまとまりをなす「複合助詞」としての用法にはどのような特徴があるのかを、以下の1.2の幾つかの先行研究を通し、確認することにする。

1.2 複合助詞「として」

<1> グループ ジャマシイ(1998) ;

→「として」は、名詞に接続して資格・立場・部類・名目などを表す。

(11) 彼の料理の腕前はプロのコックとしても十分に通用するほどのものだ。

(12) 大統領を国賓として待遇する。

(13) 軽井沢は古くから避暑地として人気があるところだ。

(14) 文学者としては高い評価を得ている彼も、家庭人としては失格である。

<2> 塚本(1991) ;

塚本(1991)では、「～として」で示される名詞は、資格、立場、名目などを表すと同時に、以下に示すように、必須補語になり得る場合と副次補語になり得る場合の二つがあることが示されている。

<必須補語として認められる場合>

- (15) 二年ごとに三分の一が入れ替わる、などを留意点として(に)挙げ、「公平にして公正」なものすることを強調している。
- (16) 神戸市地域福祉課は「地下水源を探していたので、予想もしないものけもの。せつかく福祉施設の造成地に出たのだから、浴場として(に)利用するだけでなく、水治療室や、若い人も利用できる健康増進施設などもつくりたい」といっている。
- (17) また、ヘピースモーカーとして(で)も知られ、一日五箱のたばこを吸っていたが、83年9月肺がんと診断された。

すなわち、「として」句が必須補語として用いられる場合とは、「～として」句が、能動動詞の場合なら「を」、受身動詞の場合なら「が」で表示された補語の中にある名詞類と同一視されている場合を指している。なお、この際の「～として」は、上記例文でも見られるように、「に」や「で」といった単一の格助詞との交替が許される特徴もある。

<副次補語として認められる場合>

- (18) 「ぜひ、本当のことを」—ロス疑惑の中心人物三浦和儀が殺人未遂容疑で逮捕されたことで、三浦の妻としてナゾの死を遂げた一美さん(当時二八)の両親、佐々木良次さんと康子さんは…
- (19) 韓国の美人歌手ケー・ウンスクがゲスト。ケはCFモデル、歌手として韓国の芸能界で活躍、このほど「大阪暮色」で日本デビューした。
- ；両方全て、適当な単一の格助詞と交替不可能

これに対し、「として」句が副次補語として用いられる場合は、単一の格助詞との交替現象が起こり得ず、「として」句も談話構造上、容易に取り除くことがで

きる要素である特徴がある。

<3> 馬(1997a) :

従来、「として」の諸用法が「資格・立場」を表す表現とされ、それ以上の内部分類が行われていないことを指摘し、「として」を、以下に示すように詳細に分類、考察している。

● いわゆる「資格・立場」を表す用法の分類

① 文中の他の要素の資格・立場を表す用法 :

①-1. 名詞句の資格・立場を表す用法

ガ格・ヲ格・経験者二格・所有格二格成分の資格を表し得る。

○ ガ格の場合

(20) 主体ガ格：斉藤は巨投の柱としてチームを引っ張ってきた。

(21) 対象ガ格：容疑者として彼の名前が浮んだ。

(22) 経験者ガ格：私は議長としてその問題の対応に悩んでいる。

○ ヲ格の場合

(23) 対象ヲ格：彼女を後任者として選んだ。

(24) 通過点ヲ格：公園を単なる通過点として歩く

○ 二格の場合

(25) 所有二格の場合：私には、会長として権力がある。

(26) 経験者二格の場合：私には親友として彼の考えていることが分かった。

⇒ 一方、①のような用法を表す「として」は、意志動詞の用例数が圧倒的に多い

①-2. 述部の資格・立場を表す用法

：従来、殆どの「として」に関する研究が、「①1：名詞句の資格・立場を表す用法」のみに集中してきたことを指摘し、「として」句に、名詞句以外の「述部の資格」を表す用法があることを次のように取り上げている。

(27) 彼は義務としてその金を返した。

(28) 彼は仕事として彼女と結婚した。

(29) 太郎は親に対する復讐として赤ん坊を連れ去った。

② 判断主体化された立場を表す用法：

この用法に属するのは「～としては」という形であり、名詞句と述部の資格を表す「①-1、①-2」の用法とは明確な振る舞いの差がある。文中の他のものの資格・立場を表すのではなく、ある条件のもとで「立場」それ自身が、事実上「判断の主体」として働く場合である。

(30) 私としては仕上げに三日はかけたい。

(31) 太郎としては彼らを応援しているつもりなのだろう。

以上、グループ ジャマシイ(1998)、塚本(1991)、馬(1997a)などで言及されている複合助詞「として」の用法を取り上げたが、結局、複合助詞「として」と、「と+「する」の連用形」を区別する基準は、「仮定、想像、見なしの意味合いがあるかどうか」ということにあり、このような意味合いが認められにくい例文の場合、複合助詞として判定できるということが言える。

しかし、問題になるのは、下記例文(32)～(34)のように、仮定、想像、見なしの意味合いがある程度認められ、かつ、ヲ格の資格とも捉えられる「として」の場合である。このような「として」は、複合助詞と認めるべきなのか、「と+「する」の連用形」として認めるべきなのかということが曖昧になる。

(32) 公園を単なる通過点として歩く。(馬[1997a])

→ 実際、通過点ではない公園を通過点と考えると(決めて)歩く

(33) 子供たちが増えたので、もともとは一人部屋だった部屋を二人部屋として使うことにしている。

→ 実際、二人部屋ではない部屋を二人部屋と考えると(決めて)使う

(34) 実は犯人でもない彼を窃盗犯として逮捕してしまった。

→ 実際、犯人でもない彼を窃盗犯と見なして(決めて)逮捕する

さらに、グループ ジャマシイ(1998)で、「と+「する」の連用形」の形として取り上げている例文(4)と(5)の場合(「AをBとして扱う」「AをBとして片付ける」)も、実際、複合助詞の意味合いがまったく認められないとも言いがたいため、複

合助詞と、「と+本動詞「する」の連用形」の形をどのように区別できるのかというところが問題となる。

そこで、本稿では、「AをBとしてV」タイプにおける「として」句が、その本動詞としての意味合いの度合いによって、幾つかの類型に分けられることを述べると同時に、本動詞の意味合いに近い「として」句には、どのような特徴が見られるのかを分析する。

一方、先行研究をまとめると、「として」句は(1)資格、立場、名目の意味を表す場合と、(2)「としては」の形で判断主体を表す場合と、大きく二つの用法があると考える立場(馬[1997a])や、(2)の用法は視野に入れず、(1)の用法をより詳細に分類している場合(塚本[1991])もある。

本稿では、「AをBとしてV」タイプを対象とするわけであるが、「として」が判断主体として解釈される(2)の用法は排除し、(1)の用法として分類できる場合の「AをBとしてV」タイプのみを考察対象としたい。また、「資格、立場、名目」として解釈される(1)の「として」の場合、資格、立場、名目などの意味合いをそれぞれ同じ解釈と考えず、分離して扱う必要があるのではないかという疑問も残るが、(1)の用法の下位分類は今後、別稿で詳細に取り上げることにし、本稿では、「資格、立場、名目」を一つの解釈として分類する先行研究に従い、分析を行うことにしたい。

2. 資格・立場・部類・名目を表す「として」句

前節では、資格、立場、名目、部類などを表す「として」句が用いられる「AをBとしてV」文に、複合助詞の用法と「と+本動詞「する」の連用形」の用法があることを取り上げ、その両用法の区別が曖昧になる場合が多いことについて指摘した。

実際、複合助詞の用法を表す「として」と、「と+本動詞「する」の連用形」を分ける明確な境界線は考えにくく、両用法はある程度連続していると考えら

れる。

そこで、本稿では「として」句に、本動詞としての意味合いを強める要素にはどのようなものが考えられるのか、そして、本動詞の意味合いの有無によって「として」句を幾つかのタイプに分類できることを指摘したい。

そして、ここでは、次のような基準から「として」句に本動詞としての意味合いが認められるのかどうかを判断することにしたい。

★ 本動詞としての意味合いに近い「として」句の判断基準

- ① 「AをBとしてV」が、「AをBと見なして/考えて/決めて」のどちらかに置き換えられやすい。
- ② 「AをBとし(て)、V」のように、文が二つに切り離される可能性がある。
(本動詞の意味合いが強い「AをBとしてV」の場合、「として」が一まとまりになっている複合助詞「として」よりは、「AをBとし(て)、V」のように、文が二つに切り離される可能性も高い)
- ③ 「として」を、格助詞「に/で」に置き換えられない。
(ヲ格の資格を表す複合助詞「として」は、格助詞「に/で」に置き換えられる可能性があるため)

2.1 「AをBとしてV」のタイプ

- ① グループI：「として」句が、「～と見なして/～と決めて/～と考えて」のどちらかに置き換えられ、かつ、文を二つに切り離すことが可能。格助詞「に/で」に置き換えられない。

→ 本動詞の意味合いが強い場合

- (35) 子供たちが増えたので、もともとは一人部屋だった部屋を二人部屋として
(とし、/*に/*で)(と考えて/みなして)使うことにしている。
- (36) 子供部屋を三日間だけ、お客さん用の部屋として(とし、/*に/*で)(と考
えて/みなして)利用する。
- (37) 芸能新聞って、実際、その真偽が定かではないことを、事実として(とし、
/*に/*で)(と決めて)取り上げる場合が少なくない。

- (38) 昔はそうでもなかったのに、時代が変わった今は、皆が彼を偉大な貢献者として(とし、/*に/*で) (と考えて/みなして)褒め称えている。
- (39) 藁ぶきの粗末なものであったが、ここに付近の子弟を収容し、開墾作業には無理な老人を教師として(とし、/*に/*で) (と決めて)、読書、算術を教えることにした。(花埋)
- (40) 開道百年を経て、これらの人達を北海道開拓に情熱をもって挑んだ先人として、(*に/*で) (と考えて/と決めて)それぞれの町村で崇め祀っているが、開拓の実態はすべて恰好のいいものばかりであったとは言えない。(花埋)
- (41) 皆、彼を異人として(とし、/(/*に/*で)怖れ避けていた。

；基本的に、もともとはそうでないが一時的にそのように判断する場合、真偽の如何が明らかにされていない場合、仮定のニュアンスが強い場合などに用いられる「としては」句に、本動詞の意味合いが強くなることがわかる。

すなわち、このような仮定のニュアンスが想定されない場合、同じ動詞が使われるとしても、「としては」句に、本動詞としての意味合いは認められにくくなる。

② グループⅡ：本動詞としての意味合いに近い「として」句の判断基準の一部を満たしている場合。

- (42) 実は犯人でもない彼を窃盗犯として(とし、/で) (と考えて)逮捕してしまっ
た。
- (43) 多額の不正融資が行われた証拠があるにもかかわらず、(その事件は)事実無根として(とされ、/で) (とみなされ)片付けられた。(グ)
- (44) 尚中はこの泰然に従い、佐倉へ移った。この間、泰然は尚中の抜きんでた学才を愛し、十七年後の安政七年に自分に五人の子供があるにもかかわらず尚中を後嗣として(に/とし、/と考え、/と決めて)佐藤家に迎え入れたのである。(花埋)

一方、同じ動詞が使われるとしても、このような仮定のニュアンスが想定さ

れない場合、「としては句」に、本動詞としての意味合いは認められにくくなる。

(45) 事件現場を目撃した警察が、彼を窃盗犯として(？とし、/で) (？と考えて/？みなして)逮捕した。→ この際、「として」は資格を表す複合助詞としてしか解釈できない。

(これは、後述するグループⅢに属する)

③ グループⅢ：仮定、見なしの意味合いを含意しない出来事が用いられ、基本的に、「として」句には資格を表す複合助詞としての解釈しか許容されない場合。

(46) 彼を新入社員として(？とし、/?と考えて/?とみなし/に)採用した。

(47) 彼は留学時代の恩師を学会の講師として(？とし、/?と考えて/?とみなし/に)招いた。

(48) 出版社は若い新人作家の作品を前衛文学シリーズとして(？とし、/?と考えて/?とみなし/に)出版する。

(49) 彼の経験を一冊の本として(？とし、/?と考えて/?とみなし/に)まとめた。

(50) 5000円を洋服代として(？とし、/?と考えて/?とみなし/に)使った。

2.2 本動詞の意味合いに影響する要素

本節では、「として」句を本動詞としての意味合いに近づかせる原因になっている要素には何があるのかについて確認していく。

① 見なし、仮定などの意味合いを表す出来事であるほど、本動詞の意味合いに近づく。

(51) 実は犯人でもない彼を窃盗犯として逮捕してしまった。(>彼を窃盗犯として逮捕した。)

(52) 子供たちが増えたので、もともとは一人部屋だった部屋を二人部屋として

使うことにしている。(> この部屋を会議室として使う。)

それぞれの例文に「実は犯人でもない」「もともとは一人部屋だった」という表現が伴われているように、これらの例文に用いられる「として」句は、実際はそうではないがそのようなもの、あるいは意味と見なして何かをする、という意味として用いられている。このような見なしや仮定の意味合いを持つ表現が用いられることによって、ひとつのまとまりを持つ複合助詞「として」であっても、「～とする」という本動詞の意味合いが強く現れるようになる。

② 共起する動詞の違いによって、本動詞としての意味合いに変化が生じる。

- (53) a. 警察は様々な事件の中で、今回の事件を先週起きた暴力騒動と関わる事件として(?とし、?とみなし、?と考え)選んだ。
 b. 警察は今回の事件を先週起きた暴力騒動と関わる事件として(とし、とみなし、と考え)捜査した。
- (54) a. 彼は彼女を恋人として(?とし、?とみなし、?と考え)愛するようになった。
 b. 彼は今、昔恋人だった彼女を容疑者として(とし、とみなし、と考え)取り調べている。
- (55) a. 芸能専門家は、彼女を今の日本のファッションリーダーとして(?とし、?とみなし、?と考え)選んだ。
 b. 芸能専門家は、彼女を今の日本のファッションリーダーとして(とし、とみなし、?と考え)注目した。

上記例文はいずれも、各例の(a)に比べ、(b)の方が本動詞としての意味合いが強い特徴が見られる。現段階で、それぞれの動詞類のどのような違いが原因となり、上記のような解釈の違いをもたらしたのかははっきりしていないが、動詞類の属性などの違いにより、同じ「として」句であっても本動詞の意味合いを表しやすくなる場合もあるということは確かなようである。

一方、動詞類の特徴が「として」句の解釈に影響するのは、次のような場合

でも見られる。

それは、動詞自体に「見なし、考え、決め」などの意味合いが既に含まれていると、「として」句は本動詞の解釈を持ちにくくなるということである。

- (56) 頼圀を愛の対象として(?とし、?とみなし、*と考え)考えたことなどはなかった。(花埋)

それは、動詞(考える)自体に既に仮定の意味合いが含まれているため、本動詞の意味合いを持っている「として」句が用いられることになっても、仮定の意味合いの重複を避けるため、「として」句には自然に本動詞としての解釈が消滅してしまうことに理由がある。

③ 「～として～を+V」の語順に比べ、「～を～として+V」の語順をとるほど、本動詞としての意味合いに近づく。

下記例文(57)～(59)を見ると、いずれも各例文の(b)より、(a)の方に本動詞としての意味合いが強く現れることが確認できる。

- (57) a. 彼女を一生の伴侶として(とし、とみなし、と考え)選択した。
b. 一生の伴侶として(*とし、?とみなし、?と考え)彼女を選択した。
- (58) a. 明るさと広さから見て、彼はその部屋を会議室として (とし、とみなし、と考え)使うことにした。
b. 明るさと広さから見て、彼は会議室として (*とし、?とみなし、?と考え)その部屋を使うことにした。
- (59) a. 彼らは彼女をまるで犯罪者として(とし、とみなし、と考え)扱っていた。
b. 彼らはまるで犯罪者として(*とし、?とみなし、?と考え)彼女を扱っていた。

何故このような現象が見られるのか、現段階でその理由までははっきりして

いないが、複合動詞の「として」は、ヲ格名詞が「として」句の前にあっても後ろにあっても文の自然さに大差は見られないが、仮定の意味合いを持っている「として」は、ヲ格名詞が「として」句の後ろに位置する方が落ち着きが良い特徴があるようである。

④「～として」と「V」の間に他の要素が介在している場合、本動詞としての意味合いが強くなる。

- (60) a. 開道百年を経て、これらの人達を北海道開拓に情熱をもって挑んだ先人として、(*に/とし、)それぞれの町村で崇め祀っているが、開拓の実態はすべて恰好のいいものばかりであったとは言えない。(花埋)
- b. これらの人たちを北海道開拓に情熱をもって挑んだ先人として(に/とし、)崇め祀っている。

上記例文(60)aは、「として」句と動詞「崇め祀っている」の間に「それぞれの町村で」が介在されており、(60)bにはそのような介在要素はない。結果からすると、介在要素のある(60)aの方が介在要素のない(60)bに比べ、本動詞としての意味合いが強いことがわかる。

それは、介在要素の存在することによって「として」句と動詞のつながりが緩くなり、文が二つに切り離される可能性もその分高くなったことに理由があるのであろう。

3. まとめと今後の課題

以上、複合助詞「として」を考察対象とし、本動詞の意味合いの度合いを中心にその類型を下位分類し、本動詞の意味合いを強める要素にはどのようなものが考えられるのかについて考察した。その結果をまとめると次のようである。

〈表3〉「AをBとしてV」における「として」句の類型別分類

判断基準 「として」 のタイプ	① 見なし、仮定 の意味合いがあ る出来事	② 二つの文に 切り離すことが可能	③ 該当格助詞 との置き換え 不可能	④ 本動詞としての 意味合い
タイプⅠ	○	○	○	強い ↓ 弱い
タイプⅡ	①、②、③どちらの条件を満たす			
タイプⅢ	×	×	×	

●「として」句の本動詞としての意味合いを強める要素

- ① 見なし、仮定などの意味合いを表す出来事であるほど、本動詞の意味合いに近づく。
- ② 共起する動詞の違いによって、本動詞としての意味合いに変化が生じる。
- ③ 「～として～を+V」の語順に比べ、「～を～として+V」の語順をとるほど、本動詞としての意味合いに近づく。
- ④ 「～として」と「V」の間に他の要素が介在している場合、本動詞としての意味合いが強くなる。

本稿では、上記のように、主に、資格、立場・部類・名目などを表す複合助詞「として」の用法について注目したが、今後は下記例文(61)、(62)のように「として」句がある条件のもとで「判断の主体」の役割をする場合と、下記例文(63)、(64)のように、「として」句が評価基準を表す場合について注目していきたい。

- (61) 「ともかく、私としては、柳や尾島社長の仕打ちに対して、何一つ話すつもりはない」
- (62) 太郎としては彼らを応援しているつもりなのだろう。
- (63) 仕組みとしてはアメリカのベル・カンパニーに似ている。
- (64) 当時の専門家の常識としてはまず読解不可能と考えていいものである。

これらの「として」の場合は通常「としては」のような形をとり、「は」の省略

ができない形として用いられる特徴がある。特に、これらの「として」は、資格、立場・部類・名目などを表す「として」に比べ、先行研究も少なく、その用法や特徴などが詳細に考察されていない。

そこで今後は、資格、立場を表す「として」の分析を進める上で、判断主体を表す「として」と、評価基準を表す「として」の考察も加え、複合助詞「として」の総合的な分析にまで導くことにしたい。

참고문헌

- グループ・ジャマシイ編 (1998) 『日本語文型辞典』, くろしお出版
- 杉本武(2003) 「複合格助詞「にとって」について」『文藝言語研究 言語編』44, 筑波大学
- 砂川有里子(1987) 「複合助詞について」『日本語教育』62, 日本語教育学会
- 高井曜子(1999) 「「名詞+トシテ」について-同一関係からテキストにおける焦点化へ-」
『国語学会 1999年度秋期大会予稿集』, 国語学会
- 塚本秀樹(1991) 「日本語における複合格助詞について」『日本語学』10:3, 明治書院
- 永野賢(1953) 「表現文法の問題-複合辞の認定について-」金田一博士古稀記念論文
集刊行会編『金田一博士古稀記念 言語民俗論叢』, 三省堂
- 馬小兵(1997a) 「複合助詞「として」の諸用法」『日本語と日本文学』24, 筑波大学国語
国文学会
- _____ (1997b) 「立場・資格」を表す「として」の用法について「に・で」との比較を
中心に『筑波日本語研究』2, 筑波大学 文芸言語研究科 日本語学研究室
- 松木正恵(1990) 「複合辞の認定条件・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語教育セン
ター紀要』2, 早稲田大学
- _____ (1992) 「複合性をどうとらえるか-現代日本語における複合接続助詞を中心
に一」, 辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会(編)『辻村敏樹教授古稀記念 日
本語史諸問題』, 明治書院

<用例出典>

『CD ROM版新潮文庫の100冊』(新潮社):

- 『一瞬の夏』(1947) 沢木耕太郎(夏) / 『エディプスの恋人』(1934) 筒井康隆(エデ) /
『女社長に乾杯』(1948) 赤川次郎(乾杯) / 『風に吹かれて』(1932) 五木寛之(風) / 『錦
繡』(1947) 宮本輝(錦) / 『コンスタンティノーブルの陥落』(1937) 塩野七生(コンス) /

『忍ぶ川』(1931) 三浦哲郎 (忍ぶ) / 『聖少女』(1935) 倉本由美子(少女) / 『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』(1949) 村上春樹(世界) / 『太郎物語』(1931) 曾野綾子(太郎) / 『二十歳の原点』(1949) 高野悦子(原点)/ 『花埋み』(1933) 渡辺淳一(花埋) / 『パニック・裸の王様』(1930) 開高 健 (パニ)/ 『ブンとフン』(1934) 井上ひさ (ブン) / 『若き数学者のアメリカ』(1943)藤原正彦(若き)
『日本語文型辞典』(ゲ)

※ 出典が表示されていないのは作例によるものである。

- ❖ 투고일 : 2006. 12. 31
- ❖ 심사일 : 2007. 1. 25
- ❖ 심사완료일 : 2007. 2. 15